『闘技者サムソン』の制作年代について

森　道　子

要　旨

『闘技者サムソン』の制作年代にはいまだ決定的証明はない。『復楽園』と合本で出版されたため、同時期と考えられてきた。1949年に W. R. Parker が異論を表明して以来、現在に至るまで賛否両論が繰り返されてきた。従来定説であった時期に対し、３時期が提案されているが、どれも定説を覆すだけの説得力をもたないとされる。

本論では、光、盲目、忍耐、などの語の使用によって、ミルトンが全盲を観念した時期からあまり遠くない、1653年ごろの制作であるとの主張を支持する。

キーワード：光、盲目、patience、サムソン、ソネット16番

オクスフォード大学出版社企画の *The Complete Works of John Milton*（全11巻）の第１回配本として、第２巻の *The 1671 Poems: Paradise Regain'd and Samson Agonistes* が出版された。1671年のタイトルページは、*Paradise Regaine'd, a Poem in Ⅳ books. To which is added Samson Agonistes* である。

ここで改めて、『闘技者サムソン』（*Samson Agonistes*）の制作年代を議論したいと思う。このタイトルから、この出版はあくまでも『復楽園』（*Paradise Regained*）が主目的であって、『闘技者サムソン』は、“to which is added”と、追加されたものだとわかる。作者にとって、二つの作品は等価に並べられたものではない。その後、1673年に再版する、1645年出版の短詩集にも、新しく未発表の22編の英詩と２編のラテン詩が追加されている。[1] 未発表のものは、すべて、過去の制作で、出版時に制作されたものではない。さらに、注目したいのは、そのうちの１編が、全盲となった悲嘆を歌うソネット16番である。[2]

１）Barbara Lewalski, *The Life of John Milton: A Critical Biography*, Blackwell, 2000, 504

２）19番が従来の番号付けだが、フェアファックス、クロムウェル、ヴェインへの３編のソネットを番号付けから外している Carey and Fowler 編に従う。

『闘技者サムソン』の制作年代に関しては、1949年に初めて、W. R. Parker が『失楽園』（*Paradise Lost*）と『復楽園』後の1667～70年制作とされる従来のものに、両叙事詩以前1646～55年に制作されたと異議を唱え、ミルトン研究者たちを驚愕させた。[3)]

彼に続いて、A. S. P. Woodhouse が同じく『失楽園』以前でも、ミルトンの内面で絶望と希望の交錯した1660～61年を主張した。Buchanan は、Giraldi, Cavallerino, Tasso 等の劇における騎士道の反響がうかがわれるため、イタリア旅行から帰国して間もない1640～41年ごろを提案する。こうしてほぼ４時期が想定されている。

その経緯は、Merritt Hughes 編 *John Milton: Complete Poems and Major Prose*（1957年）に収録の『闘技者サムソン』への序文や、Mary Ann Radzinowicz 著 *Toward Samson Agonistes: the Growth of Milton's Mind*（1978年）の‘appendix E: the Date of Composition of *Samson Agonistes*’に詳細に検証され、両者とも伝統的制作年代に軍配をあげている。その間、1971年に Parker は J. A. Wittreich 編 *Calm of Mind* 収録の‘The Date of *Samson Agonistes Again*’でそれまでの反論に応酬し、自説を確認する。

しかし、*The Life of John Milton*（2000年）で、B. Lewalski が“The traditional dating, after *Paradise Regained* and during the years 1667～70, is generally accepted; efforts to place it in the 1640s or 1650s on metrical and biographical grounds, have not proved persuasive”と一蹴するように、[4)] Parker 等の早期制作支持者は少数派である。上に挙げたオクスフォード版も、編者 Laura L. Knoppers が、Lewalski に献辞を呈していることからもわかるように、当然、Lewalski と同意見である。

1949年の Parker の証明は、３点である。まず、ミルトンの甥であり、生徒でも、筆耕でもあった Edward Phillips が、叔父の死の20年後に発表した“the Life of Mr. John Milton”に『闘技者サムソン』の制作年代は不明だが、『復楽園』はすべて1667～70年に仕上げられ、「その荘厳・崇高さを考えると驚くほど短い期間」だと述べている。もし、『闘技者サムソン』もその時期に書かれたのであれば、Phillips が言及しないはずはない。したがって、Phillips が叔父の家に出入りしていない時期と考えられるが、それは、彼が生徒となる前、つまり1642年以前、あるいは、1647年、1648年である。また、1651～55年のあいだは時折叔父を訪ねているが、1653年には訪ねていない。次に、1668年の『失楽園』第１版の注“Verse”で rhyme を攻撃しているが、『闘技者サムソン』には押韻がある。第３は、『復楽園』において“Hellenic culture, including Attic drama”を攻撃した後で、ギリシャ悲劇に則った詩劇を作成するはずがない、である。

この主張は多くの学者からの賛否両論を招き、1971年に Parker は *Calm of Mind* 掲載の‘the Date of *Samson Agonistes* Again’で自説を擁護する。例をあげると、政治的・自

３）‘The Date of *Samson Agonistes*’, PQ xxviii, 1949, 145～66
４）Lewalski, *Ibid.*, 490

伝的言及に関することで、コーラスの“Oft leav'st them to the hostile sword / ... their carcases / To dogs and fowls a prey”（692－4）はクロムウェルの遺骸を暴いて辱めたことへの暗示とする説に対し、ホメロスの *Iliad* の冒頭の反映といえると突く。また、Dalila が『闘技者サムソン』ではサムソンの妻だが、『失楽園』（9, 1060－61）では娼婦である。『復楽園』で、ミルトンはサタンにギリシャ悲劇を称賛させるだけでなく、『闘技者サムソン』の基本的仮説を覆す。つまり、1643～45年の離婚論群で繰り返し主張した、“the wisest men can fall victim to feminine charms”を『闘技者サムソン』（1034－60）も共有するが、『復楽園』では、“How many have with a smile made small account / Of beauty and her lures, easily scorned / All her assaults, on worthier things intent !”（193－5）であり、“weak minds”だけが陥る、と言う。このことからも、『復楽園』が『闘技者サムソン』より後の作品であることが確信できよう。

Radzinowicz は1949年から78年までの論戦を３つの視点から余すところなくまとめている。第１に、韻律、文体の視点から、第２に、テーマ的・知的論点から、第３に、自伝的・歴史的言及から、である。

１．Parker の説を始めとし、1640～41年を提案した A. Gilbert の説。『闘技者サムソン』のプロローグ“Of that sort of Dramatic Poem which is called Tragedy”は出版時に付けられたもので内容と一致していない。悲劇に“Comic stuff”を混入する、という過ちを自ら犯している。つまり、Harapha と Dalila は俗悪で滑稽だ。もちろん、Radzinowicz は反証をあげている。

２．G. Muldron、J. M. Steadman、F. M. Krouse、A. Low たちの説。『闘技者サムソン』は *De Doctrina Christiana* の王政復古後の神学的テーマにしっくり合う。ミルトンの「神の選び（election）」の考えは王政復古以前の政治パンフレットのものから変化していて、新しい“doctrine of election”はサムソンのなかに具現化されている。また、*Of True Religion* の用語上の反響がある。たとえば、“foolishness of atheism”、“forbidding of idolatry”など。

３．“identification of the personal life of the poet with his creative work”を否定した時代は去り、“a virgin birth without human intervention”という text はありえない。Ants Oras の、自伝的・政治的言及は回想とも渦中とも取れる、という意見を紹介し、F. Kermode、E. Le Comte、H. Richmond、W. Hyman、J. Lawry、M. M. Mahood、Murray Roston、Boyd Berry などの意見を総括し、彼女自身の結論を述べる。

「要するに、晩年制作であることの客観的証明には事欠かない。芸術上の技能や理論はそれを支持している。『復楽園』と『闘技者サムソン』とには主題の上でも関連があり、その確認となる。自伝と時事状況への言及から、晩年の作であることはまちがいない。したがって、早期制作を唱道する者たちが、ごく普通に考えられる読み方を否認するた

めには、英雄的努力が必要である。それを遂げてから、自分たちの主張を開示すべきなのだ。つまり、『闘技者サムソン』において、ミルトンはすでに経験済みのことを描写していると、晩年制作派が言っているのに、そうではなく、不安に慄きつつ予想しているのだ、という主張をである。」[5)]

最後に、2008年 Oxford 大学出版の G. Campbell とT. Corns 共著、*John Milton: Life, Work, and Thought* における説明に耳を傾けよう。「『闘技者サムソン』の、盲目との折り合いのための個人的諸問題に対し、詳細で確実な奮闘ぶりから考えると、ミルトンがその障害を負った初めのころにこれを仕上げたと言えるかもしれない。」[6)] しかし、1654年であろうと、1669年であろうと、自伝的肖像としてのミルトンはサムソン像とは異なる。だが、『失楽園』同様、1640s や1650s の経験や主義が表現されているのは明瞭である。同時に、王政復古時の習俗もうかがわれる、と述べている。

議論の締めくくりに、『闘技者サムソン』と『復楽園』の結びの数行を引用している。

To fetch him［Samson］hence and solemnly attend
With silent obsequy his funeral train
Home to his father's house……　　（*S. A.*, 1731－3）

Thus they the son of God our Saviour meek
Sung victor, and from heavenly feast refreshed
Brought on his way with joy; he unobserved
Home to his mother's house private returned.（*P. R.*, 4, 636－9）[7)]

そして、読者に、"which is preferable ?"、あるいは、"which is more pertinent ?" と問う。そこには、ギリシャとヘブライの文学的伝統の価値の比較の議論が入りこむ。『復楽園』のキリストはギリシャ文学に対するヘブライ文学の超越性をあげる。周知のとおり、『闘技者サムソン』はギリシャ悲劇であり、『復楽園』は「ヨブ記」に範を得ている、と。すなわち、Campbell と Corns は、ミルトンが『復楽園』の後で、『闘技者サムソン』を制作することはありえない、と言っているのだ。

本論では、早期制作支持の、J. Carey と A. Fowler 編 *The Poems of John Milton*（1968年）に基づいて、『闘技者サムソン』の制作年代が、晩年ではなく、全盲の苦痛のいまだ鮮やかなころであることを検証したい。

Carey & Fowler 編では、『闘技者サムソン』を『失楽園』と『復楽園』の前に置き、

5）M. A. Radzinowicz, *Toward Samson Agonistes: the Growth of Milton's Mind*, Princeton, 1978, 407
6）G. Campbell & T. Corns, *John Milton: Life, Work, and Thought*, Oxford, 2008, 360
7）ただし、『復楽園』第４巻 552～３には、"I［Satan］to thy Father's house / Have brought thee" とある。

さらにその直前に、ソネット16番を配置する。このソネットも正確な制作年代は不詳であり、盲目が完全となった1652年ごろが定説となっている。この編集は非常に説得力がある。つまり、ソネット16番と『闘技者サムソン』のあいだには、センティメントにおいてもキーワードによっても、深いつながりがあるからである。

ソネット16番は、“blind”も“blindness”の語も用いないが、“blind”と同義の「“light”の喪失」を、“how my light is spent”と“light denied”と2度訴えて、悲痛な心情を吐露している。このソネットほど、サムソンの盲目への懊悩に近い作品はない。ソネット前半の、視力と天職の喪失の愁訴を、後半の“Patience”が鎮める。このパターンは『闘技者サムソン』に見られ、14行詩に対して、1758行という長詩であるため、盲目への嘆きも多く、長い。また、コーラスによる“patience”の勧めも3度繰り返される。

“blind”は、『闘技者サムソン』に9回、『失楽園』に3回、『復楽園』には1度のみ用いられ、“blindness”は『闘技者サムソン』だけに4回使用される。サムソンの盲目への苦痛は、“Blind among enemies, O worse than chains”(68)、“Thy foes' derision, captive, poor, and blind”(366)、“Now blind, disheartened, shamed, dishonoured, quelled”(563)などと個人的な呻きとなって発せられる。

盲目の対極である光、また、光の喪失としての盲目、から、“light”も重要な語である。『闘技者サムソン』で、サムソンは、

Light the prime work of God to me is extinct,
And all her various objects of delight
Annulled, which might in part my grief have eased,
Inferior to the vilest now become
Of man or worm; the vilest here excel me,
To daily fraud, contempt, abuse and wrong,… (70－77)

と、盲目を卑下し、自嘲する。また、

Since light so necessary is to life,
And almost life itself, if it be true
That light is in the soul,
She all in every part; why was the sight
To such a tender ball as the eye confined? (90－4)

と、光はあくまでも外面的、肉体的である。ミルトンの直接の声としか言いようのない、慟哭のクライマックスは有名な次の箇所である。

O dark, dark, dark, amid the blaze of noon,
Irrecoverably dark, total eclipse
Without all hope of day !

O first-created beam, and thou great word,
Let there be light, and light was over all;
Why am I thus bereaved thy prime decree?（80－5）

盲目を生きるとは、生ける屍にほかならない。

To live a life half dead, a living death,
And buried; but O yet more miserable !
Myself, my sepulcher, a moving grave,…　（100－2）

サムソンは、光の内面化など思いもつかず、達成どころではない。

Shut up from outward light
To incorporate with gloomy night;
For inward light alas
Puts forth no visual beam.　（160－3）

あるいは、“these dark orbs no more shall treat with light, / Nor the other light of life continue long”（591－2）と、視力の喪失と内面的精神力の喪失は一致している。また、父親のマノアはサムソンの視力を回復する神の奇跡に、藁をもつかむ思いですがっている。

But God who caused a fountain at thy prayer
From the dry ground to spring, thy thirst to allay
After the brunt of battle, can as easy
Cause light again within thy eyes to spring,
Wherewith to serve him better than thou hast;（581－5）

大詰めの大音響に、サムソンの変化と行動を察するときも、“And since his strength with eyesight was not lost, / God will restore him eyesight to his strength.”（1502－3）と、父は望みを棄てきれない。コーラスもマノアに同調し、神の奇跡をより頼む。

What if his eyesight（for to Israel's God
Nothing is hard）by miracle restored,
He now be dealing dole among his foes,
And over heaps of slaughtered walk his way?
……
Yet God hath wrought things as incredible
For his people of old; what hinders now?　（1527－31）

このマノアとコーラスの悲願は、全盲を悟ったころのミルトン自身の願いであり、祈りであったにちがいない。

ソネット16番の“patience”は、ミルトンが天命とも神意とも考えていた、詩人としての才能（“one talent”）を完成できない挫折感から出る愚痴をたしなめる。さらに、締

めくくりの couplet で、“only stand and wait” も神への奉仕であると教える。そして、「私」ミルトンは受容と諦観に導かれる。

この “patience” も『闘技者サムソン』では、4 回使用されるうちの 3 回がサムソンに対するコーラスのいさめであり、勧めである。

Many are the sayings of the wise
In ancient and in modern books enrolled;
Extolling patience as the truest fortitude; (652－4)

やはり、“fortitude” と結びつけて、“But patience is more oft the exercise / Of saints, the trial of their fortitude”（1287－8）と勧め、さらに、“May chance to number thee with those / whom patience finally must crown”（1295－6）と結ぶ。

サムソンは、頭髪に宿る怪力によって成し遂げるはずであった神意に背き、その罪と罰の全てを受容した後で、“then vigorous most / When most unactive deemed”（1704－5）である不死鳥のように、「無活動と見える」うちに使命を果たす。コーラスはその結果を、“O dearly-bought revenge, yet glorious ! / Living or dying thou hast fulfilled / The work for which thou wast foretold / to Israel”（1660－3）と、マノアは “Samson hath quit himself / Like Samson, and heroicly hath finished/ A life heroic, on his enemies / Fully revenged”（1709－12）と、ともに “revenge” を讃える。ソネットの「私」は神意を計りかねつつ、神の “yoke” を耐える決心で終わる。『闘技者サムソン』では、サムソンはその “yoke”、すなわち、人間の現実の耐え難い苦渋、を受容した後に報いを受ける。つまり、“revenge” を成就するのである。終焉のカタルシス、

His servants he with new acquist
Of true experience from this great event
With peace and consolation hath dismissed,
And calm of mind all passion spent. (1755－8)

は、カタルシスのないソネット16番のカタルシスの代替と言える。ソネットの切ない受容の底に “spent” されないで残る “passion” の残滓がここで浄化されている。ソネット16番と『闘技者サムソン』のあいだには、隠れた、緊密なつながりがある。『闘技者サムソン』の制作はソネット16番の制作時期に続かなければならない。少なくとも、次にあげる理由からも、そのあいだに、長短の叙事詩 2 編が介在するはずはない。

『失楽園』と『復楽園』における “blind”、“light”、“patience” には、この緊密な相関関係はないが、共通性がある。

『失楽園』においても『復楽園』においても、“blind” は過去の偉大な盲目の詩人や予言者に当てはめられる。“Blind Thamyris, and blind Maeonides, / And Tiresias and Phineus prophets old”（『失楽園』 3, 35－6）や、“Blind Melesigenes thence Homer called”

（『復楽園』 4, 259）のように、“blind”は盲目の身でありながら、傑出した業績を残した先人たちに対する形容辞となっている。『闘技者サムソン』の個人的、否定的、悲観的な度重なる嘆きと異なり、両叙事詩では、尊敬と崇拝のこもった賛辞でさえある。

『失楽園』の光は、天上の光、光そのものである神、天使たちの光、天地創造の光、太陽、である。“God and light of heaven”（1, 73）、“celestial light”（1, 245）、“Heaven's purest light”（2, 137）、“angels, progeny of light”（5, 600）、“Let there be light, said God, and forthwith light/ Ethereal, first of things, quintessence pure”（7, 243－4）という表現が散在する。だが、最も集中するのは、第３巻の巻頭の光への呼びかけで、ミルトンの個人的詠嘆である。しかし、ここでは光と光の喪失が内面化されきっている。

Hail, holy light, offspring of heaven first-born,
Or of the eternal co-eternal beam
May I express thee unblamed? Since God is light,
And never but in unapproached light
Dwelt from eternity, dwelt then in thee,
Bright effluence of bright essence increate.
Or hear'st thou rather pure ethereal stream,
Whose fountain who shall tell? Before the sun,
Before the heavens thou wert, and at the voice
Of God, as with a mantle didst invest
The rising world of waters dark and deep,
Won from the void and formless infinite.　　（3, 1 －12）

そして、“thou / Revist'st not these eyes, that roll in vain / To find thy piercing ray, and find no dawn”（3, 22－24）と自らの盲目を述べ、同じ運命の詩人２人と予言者２人をあげる。続く盲目の切なさも美しい抒情詩のように叙述される。

Thus with the year
Seasons return, but not to me returns
Day, or the sweet approach of even or morn,
Or sight of vernal bloom, or summer's rose,
Or flocks, or herds, or human face divine;
But cloud in stead, and ever-during dark
Surrounds me,…　　（3, 40－6）

外面的、自然的光の欠如のため、それだけ一層、光の内面化を祈求する。

So much the rather thou celestial Light
Shine inward, and the mind through all her powers

Irradiate, there plant eyes, all mist from thence
Purge and disperse, that I may see and tell
Of things invisible to mortal sight. (3, 51－5)

『失楽園』の最終巻で登場する光は、大天使ミカエルのヴィジョンによって教育を受けた後、楽園からの追放を受容するアダムの言葉にある。自分の犯した罪への神の報いの業は、天地創造の折り、最初に造られた光、“Light out of darkness”（12, 473）よりすばらしい、とアダムは歓声を上げる。この光は当然、自然の光であり、太陽となるのだが、同時に、ここでは、アダムの獲得した“the sum / Of wisdom”（12, 575－6）を象徴する。

『失楽園』の光は、最も個人的な第３巻の光でさえ、『闘技者サムソン』の絶望的渇望の対象とはかけ離れている。しかし、『復楽園』へは見事に連繋していく。『復楽園』では、光への７回の言及は第４巻に集中する。ほかには、第１巻116行の地獄の闇との対比で述べられるにすぎない。第４巻の“he who receives / Light from above, from the fountain of light, / No other doctrine needs, though granted true;”（288－90）は、『失楽園』第３巻の天使たちの神への頌栄歌を踏まえている。

Thee father first they sung omnipotent,
Immutable, immortal, infinite,
Eternal king; thee author of all being,
Fountain of light, thy self invisible (3, 372－5)

『復楽園』で最後に登場する光は、神の光の反映であるキリストへの天使たちの賛歌のなかにある。“True image of the Father whether throned / In the bosom of bliss, and light of light / Conceiving”（4, 596－8）。

“patience”は『失楽園』に５回、『復楽園』に４回現れる。『失楽園』では、第９巻の巻頭に、古代叙事詩に取り上げられた主題より一層重要なテーマとして登場する。外面的、肉体的美徳に対し、内面的、精神的美徳を表し、より価値の高いものとして称揚される。

Wars, hitherto the only argument
Heroic deemed, chief mastery to dissect
With long and tedious havoc fabled knights
In battles feigned; the better fortitude
Of patience and heroic martyrdom
Unsung; (9, 28－33)

大天使ミカエルは二度、アダムに“patience”の勧告をする。“thereby to learn / True patience, and to temper joy with fear / And pious sorrow”（11, 360－2）と“Add virtue,

patience, temperance, add love, / By name to come called Charity”（12, 383－4）で、ともに“temperance”と並置される。この組み合わせは、『復楽園』にも見られる。『復楽園』で“patience”は４回中３度まで、つまり、ほとんど全てが、ヨブに、つまり、サタンの誘惑に屈しなかった旧約の義人に、適用される。

By deeds of peace, by wisdom eminent,
By patience, temperance; I mention still
Him whom thy wrongs with saintly patience borne,
Made famous in a land and times obscure;
Who names not now with honour patient Job？　　（3, 91－5）

このように、“patience”は、『失楽園』、『復楽園』では、個人的ではなく、一般的、概念的美徳として讃えられるのである。

『復楽園』のキリストは実に冷たく、厳しく、誘惑を退けていく。ためらいも迷いもなく、淡々と、易々と、「ノー」を言い続ける。荒野での誘惑は十字架上の死による人間の罪の贖いに対する準備である。救い主としての資質が試され、確立される場なのである。したがって、『復楽園』のキリストには、人類のために愛の生け贄として、わが身を捧げる『失楽園』のキリストの面影はない。“love”という語は１度だけ、それもサタンの台詞に登場するだけである。『失楽園』第３巻は、“where shall we find such love”（213）、“the Son of God / In whom the fullness dwells of love divine”（224－5）、“immortal love / To mortal men”（267－8）、“O unexampled love, / Love nowhere to be found less than divine”（410－1）等々、キリストの愛の賛美にあふれている。[8)]

原典の新約聖書の記述に忠実に、旧約聖書のなかの神の言葉を引用して、『復楽園』のキリストは簡潔で、平易な口調で、誘惑を退け続ける。その延長線上に、２年後に出版される政治パンフレット、*Of True Religion, Haeresie, Schism, Toleration, and What best means may be us'd against the growth of Popery* はある。

このパンフレットで、ミルトンは、“as the main Principles of true Religion”として、２点あげる。一つは、“the Rule of true Religion is the Word of God only”であり、もう一つは、“their Faith ought not to be an implicit faith, that is, to believe, though as the Church believes, against or without express authority of Scripture”[9)]である。そして、パウロの「コロサイ人への手紙」から、“Let the word of Christ dwell in you plentifully, with all wisdome”（3, 16）を引用する。それには、“the constant reading of Scripture”（435）や“attentive study of Scripture”（436）が不可欠である。さもなければ、ローマ教会のよう

８）ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』で次男イワン作の短編「大審問官」は、同じく荒野の誘惑を主題とする。大審問官（サタン）の長舌をただ黙って聞くだけのキリストは最後に、大審問官の口にキスをする。そのキスは大審問官の老いて、色のない唇で燃える。

９）*Complete Prose Works of John Milton*, Yale U.P., 1982, 408－40.

に、“the Learned only”（437）が理解し、“a Deputy”として指導するので、一般信者のうちには“ignorance of Scripture”（436）が蔓延し、“implicit faith”に陥る。[10] 他方、各自が聖書を読んで解釈すると、さまざまな意見が生じるであろうが、それは、“tolerate”しなければならない。プロテスタントのなかでたがいに“tolerance”に励み、一致していなければ、ローマ教会に対抗できないではないか、と叱咤する。このように“love”は不必要なのだ。

こうして、内面化という点で『失楽園』から『復楽園』は連繋する。『失楽園』の結論と言える、“A paradise within thee, happier far”（12, 587）や、“peace within”（9, 333）は、『復楽園』の、人類の贖罪をするキリストの内面の確立と同様である。「高邁な企画、偉大な行為には金銭がものを言う。金さえあれば栄誉も友人も征服も国土も思うままに手に入れることができる」と嘯いて、この世の富を提供するサタンに、キリストは“he who reigns within himself, and rules / Passions, desires, and fears, is more a king”（2, 466－7）と答え、そうでない者は、“anarchy within”に屈することになる、と言う。このように見てくると、『失楽園』から『復楽園』、そして、*Of True Religion* へと続く回路には、『闘技者サムソン』の、疾風怒濤のような内面の状態が入りこむ余地はないのである。

『闘技者サムソン』の制作は1653年頃と確信する。

10）まさに、「大審問官」の立場である。